

輪島市三井町^{とあい}渡合遺跡

1992

石川県立埋蔵文化財センター

— 例 言 —

- 1 本書は石川県輪島市三井町渡合に所在する渡合（どあい）遺跡の主要地方道七尾・輪島線交通安全施設工事に係わる緊急発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の発掘調査は石川県立埋蔵文化財センターが実施した。1991年5月13日から5月17日まで調査を行い、小嶋芳孝（主査）、柿田祐司（嘱託）が担当した。
- 3 発掘調査にあたっては砂上正夫（輪島市教育委員会）、石川県立埋蔵文化財センター諸氏のご協力・教示を得た。
- 4 本書の執筆と編集は柿田が担当した。
- 5 出土品・記録資料は、石川県立埋蔵文化財センターが管理している。



第1図 遺跡の位置

I 遺跡の位置と環境

輪島市は能登半島の北西部に位置し、東側は珠洲市・柳田村、西側は門前町、南側は穴水町、北側は日本海に面し、沖合いには七ツ島・船倉島がある。市域の大部分は山地であり、河原田川・鳳至川が中央部を北に流れ合流し、輪島川となり日本海に注ぐ。これらの川の流域に輪島平野が広がる。市東部は町野川流域に町野平野が開けている。

三井地区は穴水町と輪島市街域とのほぼ中間の距離に位置する。河原田川沿いとその支流の仁行川、中川に沿って三井町仁行、本江、中、渡合、興徳寺、長沢、漆原、小泉、細屋、新保、市ノ坂、洲衛、内屋などの集落が点在している。穴水町と輪島市を南北に結ぶ主要地方道七尾・輪島線に沿って河原田川は北流し、七見川、小又川は南流している。これらの河川は洲衛、市ノ坂付近を分水嶺として、能登半島特有の低丘陵性山地を開析しながら樹枝状平野を形成し蛇行しながら日本海に注ぐ。周辺の山地は標高200m前後を測り樹枝状平野および小谷に存する集落はほぼ海拔100m前後の高さにある。本遺跡は河原田川左岸の舌状台地上に立地し、現在は畑地として利用されている。

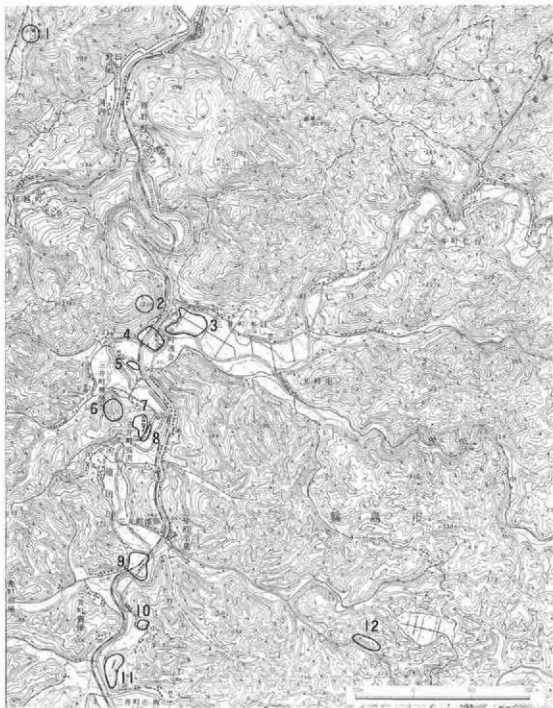
本遺跡の周辺には縄文から中世の遺跡が点在している。本遺跡の北方約200mの丘陵上には本江鉦ヶ城遺跡があり、磨製石斧が単独で出土している。のと鉄道能登三井駅前西方約400mには興徳寺横穴古墳群、三井美登里ヶ丘遺跡が所在する。横穴古墳群は1979年に7号横穴が発掘調査され、その形態から7世紀後半の年代が与えられている。また7基発見されているが、その立地条件から7基以上存在したと考えられている。美登里ヶ丘遺跡は1984年に中学校の建設地として造成工事された際に発見されたものである。四柳高孝氏により試掘調査がなされ、弥生末から古墳初頭の遺物が採集されている。集落が丘陵上に営まれていたと考えられる。河原田川上流の三井町洲衛では窯跡、製鉄遺跡があり製鉄遺跡は調査されていないため詳細は不明であるが、窯跡については昭和40年に石川考古学研究会によってトレンチ調査が実施され、吉岡康暢氏により報告がなされた。三井新保遺跡は1982年に発掘調査が行われ、縄文時代前期後半の規ヶ森期～福浦上層期を中心として古墳時代初頭の須恵器・土師器、珠洲焼等を検出している。

II 調査に至る経緯と経過

本調査は、県土木部による主要地方道七尾輪島線安全施設工事に係わるもので、同道路整備課の依頼により埋蔵文化財センターが調査を実施した。1989年12月14日の分布調査により耕土下に土師器を包含する黒色土が確認され、協議の結果、発掘調査で対応する事となり、1991年5月13日～5月17日にかけて現地調査を行った。重機により耕土下約1m除去したあと、遺構検出を行ったが、遺構・遺物とも希薄であった。天候にも恵まれ現地調査は予定どおり終了した。

発掘調査作業員名簿（順不同）

笹川とよ子　中嶋よしの　堂畑　テル

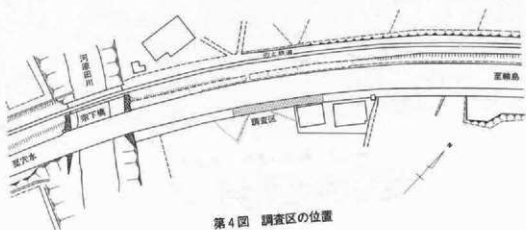


第2図 周辺の遺跡(1/25,000)

- 1 別所谷八幡神社古塚群 (中世) 2 中江堀・城遺跡 (縄文・中世) 3 中江遺跡 (古墳・中世)
 4 渡合遺跡 (縄文・平安) 5 舞部寺跡遺跡 6 舞部寺遺跡 (縄文) 7 二月天見草・丘遺跡 (縄文・古墳)
 8 舞部寺横穴墓 (古墳前期) 9 三井野遺跡 (縄文) 10 キアツ遺跡 (平安)
 11 三井小泉遺跡 (縄文・奈良・平安) 12 別所ダケ遺跡 (不詳)



第3図 遺跡周辺の地形図 (1/10,000)



第4図 調査区的位置

Ⅲ 調査結果

1 遺構 (第6図)

遺構は地表下面約1m20cmで検出した。SX-01A・Bは調査区の範囲外にでるためその規模はわからないが、層位をみると旧地表面が左右から緩やかに傾斜していることから、大形土坑あるいは溝と考えられる。SK-01は幅約40cm、深さ約17cmを測る。SK-02は幅約50cm、層位から深さ約40cmを測る。SK-03は唯一全体がわかるものであるが、幅約50cm、深さ約5cmを測る。これら土坑の時期等についてはわからないが、新しいものかもしれない。他は、ビット約20を検出しているが、その性格については不明である。

2 遺物 (第5図)

遺物は縄文土器、土師器が出土している。今回の発掘調査で出土した遺物全てを図化した。1～3は縄文土器であり、1・2はSX-01B、3はSX-01Aから出土している。1は3条の平行沈線を施し、貝殻複線圧痕文を施文する。

2は2条の沈線が認められる。内面はいずれも

ナデ調整を施す。縄文時代中期後葉、串田新式であろう。3は内外面とも摩滅しているため調整・施文等はわからない。4・5は中世土師器で、包含層から出土している。口縁部はほとんど残存していないため、口径はわからないが、10cm前後を測るものであろう。6は土師器、器種不明であるが、外面にミガキ調整・内面にナデ調整を施す。胎土には海綿骨片を多量に含む。



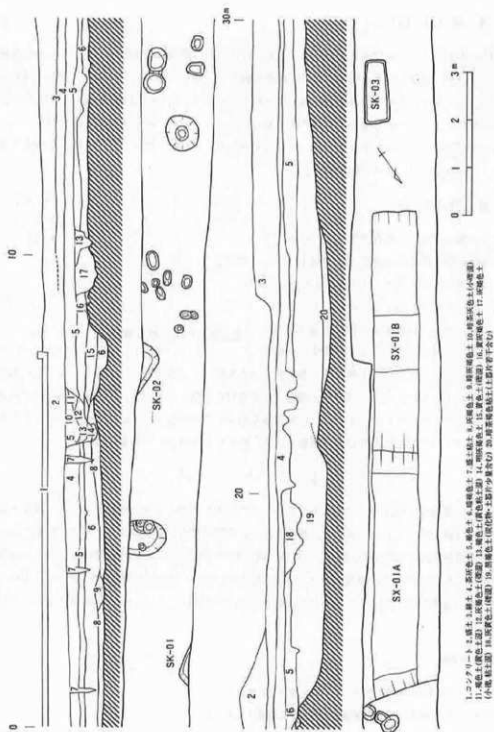
第5図 出土土器実測図 (1・2: SX-01B、
3: SX-01A、4～6: 包含層、S1/3)

ま と め

出土した遺物は小破片かつ少量であるため、その年代を考えるには十分ではないが、縄文中期から中世の遺跡と考えられる。遺跡の立地条件から、該期の集落が営まれていた可能性が考えられる。また、本遺跡の北方約200mの丘陵上には姫ヶ城があり(第3図)、石川考古学研究会により分布調査が実施されているがその報告に於いて平田天秋氏は、「南方位位には八幡神社が存し、(中略)姫ヶ城の生活遺構が存するものと思われる(平田1988)」と指摘している。中世の遺物はそれとの関係が考えられよう。

参考・引用文献

- 中島俊一 1980 『三井興徳寺横穴』 石川県立埋蔵文化センター
 平田天秋 1983 『輪島市三井新保遺跡』 石川県立埋蔵文化センター
 平田天秋 1988 『姫ヶ城』 『石川県城跡分布調査報告』 石川考古学研究会・能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団 1986 『真脇遺跡』



第6図 調査区の層位、遺構



調査前状況（北から）



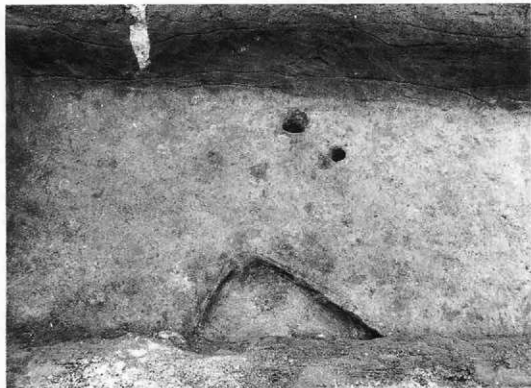
調査前状況（南から）



調査後（北から）



調査後（南から）



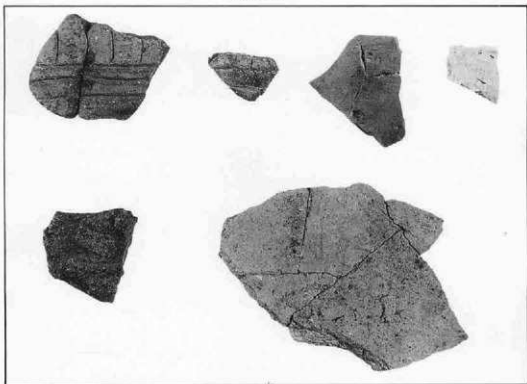
SK - 01



SK - 02



SK - 01A



出土遺物